

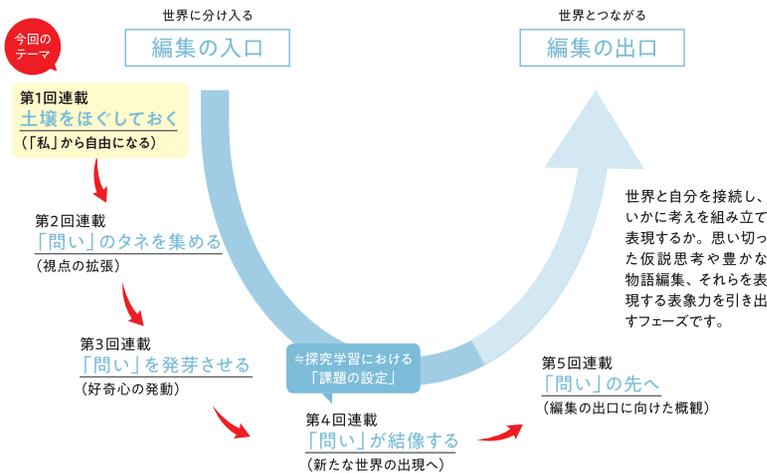
# 「問い」の編集工学

第1回

編集工学研究所 安藤昭子

## 「問い」の編集工学全体像

「課題の設定」に至るまでのプロセスに相当



## 土壌をほぐしておく——「私」から自由になる——

探究活動からイノベーションまで、世代や領域に関わらず今問われる「問う力」。「答え方」ではなく「問い方」を鍛錬するにはどうすればいいのか、「問い」の編集工学」の前提と全体像について、前回の連載第0回にてお話しいただきました。第1回は、問いの土壌となる「たくさんの私」について考えていきます。

### 自分に「ギャップ萌え」してほしい

探究心を駆り立てる力強い問いも、もとは小さな違和感やほのかな好奇心から芽吹いてくるものです。そうした微かなゆらぎは常に私たちの内側で起こっているのですが、学校や職場や家庭で何らかの役割に徹するうちに、社会的文脈の膜に覆われて見えなくなってしまう。整合性のとれた一貫した自己として社会を生きる中で、自分の内側にある複雑さや意外性が隠されてしまうのです。

本来、意外性やギャップこそが人々を動かすバネにもなります。いまや世界を席巻するアイドルグループ BTS は、「ギャップ萌え」が押し上げたスターです。端正なヴィジュアルやパフォーマンスもさることながら、舞台裏のおよそスターらしくない表情を効果的に配信していくプロデューサー・スタイルが、世界中のファンを熱狂させました。 BTS メンバーのインスタグラムの異例なフォロワー獲得スピードが二

ユースになっていましたが、「まだ見ぬたくさんのテテ」に2000万人が殺到しているわけです。源氏物語から少女漫画まで、シエイクスピアからポップスまで、ギャップは常に最強の物語装置です。

ファン心理やラブストーリーに限らずとも、物事を大きく変化させ動かしているのは、つねに落差やズレ、矛盾や葛藤です。場面に応じて「よくできてる自分」「よくやれている私」だけが、私でなくていいのです。覚束なさや心許なさ、不甲斐なさ割り切れなさを抱えて、何かを思う自分自身こそ、「ギャップ萌え」してほしい。そのためにはまず、「整合性のとれた一種の私」という幻想から脱すること、そして「たくさんの私」を自由にしておくことです。

### 「たくさんの私」を遊ぼう

子どもは「問い」の天才です。「これなに？」「なんで？」と周囲を質問攻めにし、時に核心をついた問いで大人たちをしど

ろもどろさせた時期が誰にもあったことでしょう。まだ世界と自分が一緒だった幼いころ、イメージの中では「私」は何にでもなれました。その頃の「たくさんの私」を取り戻すことができれば、ふたたび世界は「問いだらけ」になるはず。

ここで言う「たくさんの私」は、言わずもがな SNS の「裏垢／サブ垢」で便宜上使い分ける「たくさんのアカウン情報」とは違います。意図して演じ分ける複数のキャラクターばかりでなく、自分でもつかまえていない、何にでもなれる「まだ見ぬたくさんの私」が潜む領域があるのです。それこそが問いを育むゆらぎの土壌です。子どもに戻ることはできずとも、言葉の力でその領域に分け入っていく、ちょっとした遊びをご紹介します。まじょう。

次のふたつのステップで、「たくさんの私」を取り出して新しいニックネームを複数考えます。意外な自分、矛盾した私が現れてくるほど、上出来です。



### 安藤 昭子

あんどう・あきこ ● 編集工学研究所・専務取締役。出版社で書籍編集や事業開発に従事した後、2010年に編集工学研究所に入社。企業の人材開発や理念・ビジョン設計、教育プログラム開発や大学図書館改編など、多領域にわたる課題解決や価値創造の方法を「編集工学」を用いて開発・支援している。2020年には「編集工学」に基づく読書メソッド「探究型読書」を開発し、企業や学校に展開中。著書に、「才能をひらく編集工学」（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、「探究型読書」（クロスメディア・パブリッシング）など。

## たくさんの私

「私は○○○な×××である」

修飾する言葉      名詞

- ・10分で20~30個を目指します。
- ・×××は名詞、○○○はそれを修飾する言葉です。
- ・同じ言葉（「○○○」「×××」）を二度使ってはいけません。

（次ページにワークシートがあります）

### ① 「たくさんの私」を取り出す

次のルールで「たくさんの私」を書き出します。「私は○○○な×××である」という構文を、最低20個、できれば30個。「×××」は名詞、「○○○」はそれを修飾する言葉。いずれも、同じものを2回使ってはけません。

まずは、「私」を多面的に見ることから始めますが、最初の5〜10個はたいていは社会的な属性が出てきます。「私は真面目な生徒である」「私は付き合いのいい友達である」など。「娘／息子」「兄／姉／妹」「高校生」「部員」「Dionaea ユーザー」……。これだけでも、自分がたくさんの顔を持っていることに気がつきますが、大事なのはここから。こうした表面的な属性情報を使いきった後は、自分を何かにたとえて表現する「見立て」や「メタファー」を持ち出さざるをえなくなります。こうなると、だんだん、私っぽさが現れてきます。「私は遅ればなしの腕時計である」「私はなんでも入る筆箱である」など。自分を表現できそうなものを探して、そこにピタッと来る修飾語をつけてみます。もう一歩進めて、ありえない組み合わせの表現を取り入れると、更に面白くなります。「私は水が嫌いな魚である」「私は喋り疲れた宝石である」などなど。言葉になりにくい、けれどどこかに潜んでいる「たくさんの私」が顔を出し始めます。

編集工学研究所が運営する情報編集力のためのオンライン・スクール「イシス編集学校（校長・松岡正剛）」では、この「たくさんの私」に早いタイミングで取り組みます。情報を編集するにあたっては、「私」を「たくさんの私」にしておくことが、何をしても大切なことです。

### ② 「キーワード・ホットワード・ニューワード」

「キーワード・ホットワード・ニューワード」で「らしさ」をつかまえる

書き出した「たくさんの私」のセンテンスの中から、「キーワード」と思える言葉にマルをつけます。「キーワード」はピンとくる、好き、目に留まる、気になる、どんな基準でもいいです。マルをつけた「キーワード」を取り出して、その周りに連想される言葉「ホットワード」を書き出します（いくつでも）。こうして出ていく「私」にまつわる「意味のソーラス※」、つまりは「キーワード」と「ホットワード」の組み合わせから、「たくさんの私」の一部を表現するような新しい言葉「ニューワード」をつくり出します。

## キーワード・ホットワード・ニューワード

キーワード [Key]: 鍵(キー)となる言葉  
ホットワード [Hot]: [Key]の言い換え・連想  
ニューワード [New]: [Key] [Hot] から生じる新たな言葉・概念



（次ページにワークシートがあります）

この「キー・ホット・ニュー」の展開は、編集工学研究所がコピーワークをする際などによく使う方法なのですが、これを自分自身を素材にやってみます。曰く言い難い、私らしさ、をつかまえるのに、効果的な方法です。このいくつかのニューワードを「併号」や「ペンネーム」のようにして、授業や活動の中で使いわけてみる場面をつくるのもいいでしょう。新しく引き出されたペンネーム（ニューワード）同士は、必ずしも整合性のとれた情報ではないはずなので、自分の奥に隠れている思わぬ「ギャップ」にも自ずと出会えることでしょう。

### 「柔らかい私」から 問いのタネを引き出す

この柔らかい「たくさんの私」状態で、それぞれの「問い」のタネを出し合ってみるといいと思います。はつきりと疑問に思うことがばかりでなく、微かにでも違和感があること、思わず気になってしまったり、どうにも惹かれることなど。自分や仲間と作り出したペンネームを切り替えながら、白い紙に自由に書き出していきます。「何年何組氏名」として考えることは違った景色が広がることでしょうか。その中に、やがて自分を突き動かす問いの連鎖への兆しが潜んでいるかもしれません。

本連載のバックナンバーはこちらからご覧いただけます

← 続きます

※意味の類似によって言葉を分類・配列したものの

